

セイレネス・ロンド  
　　く歌姫は幻影と歌うく

公式サイト： <http://seirenesrondo.xyz>

カクヨム： <https://kakuyomu.jp/works/1177354054882023827/>

■ 00 ≪ プロローグ

■ 00-00 ≪ アウフタクト

■ 00-00-01 ≪ 宣言文-type declaration statement-

さて、始めますか。

青年はけだるげに宣言した。縛られていた両手は、今や自由だ。青年が手を軽く振る。青年を取り押さえようとした男たちが血飛沫を上げてもんどりうった。広場の周りに立ち並ぶ家々が、連鎖的に爆発した。爆風が広場に集まっていた人々をなぎ倒す。音速を超えて飛んできたガラスが人々に突き刺さる。

人々は逃げ惑う。とにかく青年から離れようと逃げ惑う。銃撃音が村中を跳ね回る。火薬と錆釘の臭いが広場を激ませる。肉の焼ける臭いは、実に香ばしかった。

青年はただひとり、逃げずに立っている赤毛の少女を見ながら言った。

「全員、死んでもらう」

少女は唾を飲む。白く細い首がぐいと動いた。

「なんで——」

「これはね」

少女の問いに言葉を被せる。青年は諭すような口調で言った。

「世界平和のためなんだ」

■ 00・00・02 赤毛の少女

あの日――。

思い出したくもない、あの日。

「うんざりする」

今見ていたものが夢だとわかっていても。

首を振り、ようやくベッドから起き上がった少女は、部屋の様子をしげしげと眺めまわした。見慣れない部屋、見慣れない家具。ベッドの近くの本棚は、まだ空だ。小さなキッチンには部屋の備品である湯沸かしポットと、自分で持ってきたマグカップがぼつんと一つ。

「転校初日だっていうのに……」

少女は見事に赤い頭髮に手をやりながら呟いた。

そして朝食用に昨夜調達しておいた菓子パンの袋を開け、インスタントコーヒーを作る。

テレビもないので、沈黙した部屋の中で黙々とパンとコーヒーを胃に流し込む。三分程度で食事を終えると、寝巻代わりに着ていたジャージを脱ぎ捨てて、真新しい士官学校の制服を身に着けた。

ざっくりと身だしなみを整え、最後に洗面所の鏡で髪型をチェックする。その鮮烈なほどの赤毛は、短くしていることもあって所々がどうしても跳ねる。もういつそベリーショートにし

てやろうかと思うことも度々あったが、いざその時になると怖気づいてしまうし、未だに短め、という領域から抜け出せていない。少女は十八歳だったが、未だ化粧はしたことがない。しかしそれでもなお、誰もが二度見するほどの肌理きめの細かな白い肌と、鋭利な輝きを持つ紺色の瞳、よく整った目鼻立ちが持つ雰囲気は、間違いない美貌に属するものと言えた。

彼女の特徴はそれだけではない。彼女は並外れた高身長を持ち主だった。百八十五センチにもなる。手足も長く、頭は小さい。一言で言えばスーパーモデルのようなシルエットの持ち主だった。

成績も優秀で、昨年度までいたユーメラの士官学校では同期の中では五本指に入るほどの結果を残していた。それだけに、何故今この時期に転校を命じられたのか、今一つ納得がいかない所でもあった。だが、少女は命令には従順だったし、そもそも彼女の立場では「拒否」という選択肢はそもそももない。かくして、少女は士官学校の総本山とも言えるヤーグベルテ統合首都校へやって来た。今は士官学校の敷地内にある寮の一室を与えられている。

携帯端末の時計を見て、少し早めに部屋を出た。

「あら、早いね」

玄関の近くで寮の管理人が声を掛けてきた。眼鏡をかけた中年の女性である。恐らくは退役軍人だろうと少女は見当をつけている。管理人は少女の完璧なまでの美貌をしげしげと見つめ、そしてやや上——天井灯のあたりを見上げながら言った。

「ええと、メラル……」

「カティ・メラルティンです」

「ああ、そう、カティね」

管理人はそこから何か言葉を続けようとしたが、少女——カティ——は足早にその場を去っていた。彼女にとつて、他人とのコミュニケーションは苦痛だったし、苦手だった。容姿に触れられるのも嫌だったし、過去に触れられるのはもはや禁忌と言っても良いくらいだった。話をすれば、話題は必然的にどちらかに及ぶ。とりわけ過去を思い出す事は、カティにとつては拷問に近い。

だからカティは基本的には仏頂面だったし、自分から話しかけることなど誰に対してもあり得なかった。話しかけられても無視こそしないが、すぐに会話を終わらせる。それには彼女の高身長が役に立った。黙っていてもプレッシャーを掛けられるので、よほどの奇特な人物でもない限り、進んでカティと長々とコミュニケーションをしようなどと考える人物はいなかった。

外に出ると、十月の風が吹いていた。ヤーグベルテ統合首都は緯度が高いため、十月ともなれば寒いくらいだ。あと一ヶ月もすれば雪が降る。

カティは「コートくらいどこかで調達してくればよかった」と少しだけ後悔しながら、遠くに見える校舎まで走った。

遠くなるカティの背中を眺める視線があった。

「ミステイルティン……か」

その視線の主は、何故だかすごく退屈そうに、そう言った。

■ 00・00・03 ≪ 世界の頂点に居座る男

ミスティルテイン——。

ともかくも、プロセスはまた一つ進んだ。

自分の指先すら見えないような完全なる闇の中で、彼は呟いた。その途端、闇の中に彼の姿が照らし出される。彼は暗黒色のスーツを身に着けていたので、その手と顔だけが闇の中に浮かんでいるように見えた。外見的には十代後半、いつていても二十歳そこそこといったところだろう。闇の中に於いて一際輝いて見える銀髪と、鮮血のような真紅の瞳が、まるでこの世ならざる何かを連想させる。

そこにぼんやりとした銀色の何かが現れる。人型のようにも見ええし、炎のようにも見えた。それを敢えて一言で言うならば、名状し難い何かだ。

「全て——」

その銀の姿が言う。その声には掴み所がまるでなく、高いとも低いとも言えないが、とにかく女声だった。

「全てはあなたの目論見通り……」

「そう」

彼は肯く。

「歌姫計画セイレスシーケンスが、ようやく動き出す」

「ふふふ、歌姫計画セイレスシーケンス、ね」

銀の姿が笑う。

「ずいぶん、待ったものね」

「そうだね。あとはどの程度、あの子たちが運命の道順を守ってくれるか、だね」

「ふふ、残酷な人……」

「僕にティルヴィングを手渡した張本人がそれを言うのかい？」

彼は微笑を浮かべている。その左目が、強く輝いていた。それに直視された銀の姿が、ふわりと揺らめく。

「今度の所有者は、私に何を見せてくれるのかしら。楽しみだわ」

「ふふ、僕は君との賭けに負けるつもりはないよ」

「あらあら……今まで一度とて、私との賭けに勝てた者はいないわよ」

その切り返しに、青年は変わらぬ微笑を浮かべている。

「ティルヴィングに纏まとわるそのすべての記憶を消し去ってしまう君がそんなことを言ったところで、何の説得力もないよ。そうだね、それをして悪魔的と言うのだろうか」

「それもそうね。悪魔と呼ばれたことの方が多いわ」

「ともかく——」

青年はツイと口角を上げた。

「僕はロキなんかになろうというわけじゃないんだ」

「知っているわ、ジョルジュ・ベルリオーズ。あなたの目論見は」

「ふふ——」

銀の姿の言葉を冷たい笑い声で掻き消す青年。

「君は全てを知っていると思っただけで、果たしてその思い込みは正しいのかな？」

「あなたは、そうね、ファウストのようなもの。私にとって未知であろうが既に、私にとっては関心のないこと。ただ聞きたいだけよ、あの言葉を」

「悪魔よ、そなたは美しい——かい？」

青年——ベルリオーズは如何にも関心がなさそうに言う。銀の姿はこれ見よがしに揺らめいた。ベルリオーズは目を細めて、闇に浮かぶ銀の炎に囁いた。

「盲目のファウストを後ろから墓穴に蹴り入れるくらい、君にはわけもないことだろう？  
でも残念ながら、僕は全てを見通す目を持っている。物理的にも、論理的にもね」

「ふふふ、そうと言うのなら、そうなんでしょうね」

挑発的な声音で返す銀の揺らめき。ベルリオーズはそれを一笑に付す。

「事の真偽はともかくとして、僕はね、関心があるんだ」

「関心？」

「そう。関心さ。この複素数の世界に対して、僕は大きいに関心があるのさ」

ベルリオーズはそう言い、銀の炎は一度大きく揺れて、掻き消えた。

「さて」

その気配が完全に消えたのを確認してから、ベルリオーズは一度目を伏せた。そしてぼそりと口にした。

「バルムンク発動」  
アトラクト

その眩きと同時に、闇の世界に光が生まれ、そして世界は完全に光に飲み込まれた。純白の世界の中に、黒づくめのベルリオーズが一人、浮かんでいる。風もないのに、見事な銀髪が揺らいでいる。

この純白の空間は、ベルリオーズが開発したシステム『ジークフリート』によって生成されている。世界のシステムは、その全てが今やジークフリートの支配下であり、あらゆる被造物はジークフリートからの干渉を受けていると言っても過言ではない。それはつまり、この惑星の全てのシステムは、ベルリオーズの支配下にあるということを示している。

「ふうん、さすがは世界樹だ」

ベルリオーズは飛び交う数式を捕まえては目を細める。

あの銀の悪魔によって与えられた『ティルヴィング』を継承<sup>エクステンド</sup>して生成された『ジークフリート』は、開発者であるベルリオーズをしても、その全容が掌握できているわけではない。だ

がしかし、それは間違いなく世界を変えたシステムである。それまでの「OS」という概念をまるで覆し、電子的システムの根本部分にパラダイムシフトを引き起こした。瞬く間に世界を覆いつくしたジークフリートは、それと同時に既存のシステムのほぼ全てを駆逐し、あるいは、食らい尽くした。

人々は当初こそ危機感と警戒感を持ちはしたものの、完璧な安定性と堅牢性が次々と実証されていくにつれ、そしてまた導入の容易さに触発され、気が付けばほぼすべてのシステムが、ジークフリートの関与を受けることとなった。残されたのはごく少数のスタンダードアロウンタイプシステムのくらいだった。

そんな驚くべきシステムを、このジョルジュ・ベルリオーズは西暦二〇七〇年、若干十六歳の若さで世に出した。ジークフリートが世界を覆いつくすのに要したのは僅かに三年に過ぎず、その間にベルリオーズは巨万の富を手にした。それから十年が経過した今、彼は個人でありながら国家レベルの力を有するようになっていた。何より、ベルリオーズを頂点とした軍産企業複合体『ヴァラスキャルヴ』が及ぼす影響力は、世界のパワーバランスを一変させるだけの力を持っていた。

世界規模のパワーシフトを起こす力を持つベルリオーズは、しかし、未だに表立った行動を起こしてはいなかったし、起こす気もなかった。ベルリオーズは表向きは、天才技術者であると同時に実業家であり、そしてまた慈善活動家であった。

「オーシュ」

ベルリオーズがそう一言口になると、その目の前に三つの球体のような多面体が現れた。白金色、灰色、そして黒。それぞれの球体はそんな色に輝いていた。

「響<sup>オ</sup>応<sup>シ</sup>統<sup>レ</sup>合<sup>シ</sup>構<sup>シ</sup>造<sup>シ</sup>体<sup>ユ</sup>……誰<sup>ガ</sup>がそう名付けたのやら」

誰<sup>ガ</sup>が名を付けたわけでもないのに、それはシステムとしてその名を持っていた。それは現実相とは違う世界——つまり、論理相——からエネルギーを引き出すことのできるシステムである。人々は従来、現実相と呼び得る「現実世界」の中でしか、エネルギーをやりくりできなかった。だが、ティルヴィングが与えられ、ジークフリートが生成され、そして、オーシュが構築され、その常識は打ち破られた。

「もうすぐだ。もうすぐ、君たちの世界が——刹那の世界が、始まる」

ベルリオーズは左目を一際赤く輝かせながら、その球状の多面体たちに向かって囁きかけた。

■ 01 ≪ イベントトリガー

■ 01 ≪ 出会い

■ 01 ≪ 二人の少女

その講義は毎回実に退屈だった。教鞭をとるのは戦術研究科戦史研究室の教授だったが、彼の語り口には抑揚もピッチも存在しない。ただ淡々と、古いテキストリーダーのように用意された資料を読み上げるだけだ。この驚異的なまでに安定した語り方は、学生たちには眠りの神の囁きと揶揄されている。

その一方で試験や課されるレポートは、鬼畜と呼ぶに相応しいレベルで、学生たちはうっかり居眠りする事すら許されない。士官学校という性質もあって、サボるなど<sup>もっ</sup>以ての外<sup>ほか</sup>だ。

教授の講義を要約すると、「ほんの十数年前まで、世界は絶え間ない戦争状態にあったが、ジョルジュ・ベルリオーズが登場してきて以後、その物理的衝突は極端に数を減らしてきていること。そしてヴァラスキャルヴに属する企業の活動により、世界の景気は急激に回復してきていること」という二点だ。これらについて詳細な解説を行っているのだが、良いのか、悪いのか、ベルリオーズ個人にしても軍産企業複合体ヴァラスキャルヴにしても、打ち立ててきた実績の質・量が尋常でなかったために、それを解説するとなると必然的に詰め込み型学習的なものにならざるを得ないのだ。

学生、即ち士官候補生たちの中で、ひときわ異彩を放つ少女が二人いた。周囲はみな十八歳前後だというのに、二人はまだ十歳そこそこのようにも見えた。それだけでも十分に不思議であつたが、二人の少女は誰もが驚くほどの美少女だつた。

一人はプラチナブロンドのストレートロング、晴れた夏空の色の瞳、美しい以外に形容詞の思いつかない目鼻立ちの持ち主だつた。着ている白いワンピースの姿も相俟つて、輝くような純白と呼びたくなくなるような存在だつた。講義を聞きながらメモを取るその表情は真剣そのものだつたが、どこか楽しげでもあつた。

その隣にびつたりとくつついて座っている緑のワンピースの少女もまた、類まれな美少女だつた。長い灰色の髪は銀と言つても差し支えないほど艶やかで、顔に対して少し大きめの眼鏡をかけていた。そのレンズの奥の新緑の瞳は、全体に纏う理知的な雰囲気とはまた違ふ、強気な印象を覚えさせられるほどに伶俐な輝きを持つていた。

二人は講義室の中段の真ん中に座っており、せっせと手にしたタブレット端末を操作して講義内容をリアルタイムに整理していた。その内容はそれぞれに異なつてはいたものの、いずれも完璧なほどに整理されていて無駄がなかつた。そう、二人は美少女でありながら、同時に天才でもあつた。さもなくば、士官学校高等部にこんな年端もいかなない少女がいられるはずもない。

そうこうしているうちに、講義が終わり、教授は学生たちとついに一度も視線を合わせぬま

まに講義室から出て行ってしまった。

「つかれたー」

白いワンピースの少女がタブレットを持ち上げながら呻いた。

「まったく、事象の地平面が見えるかと思ったよー」

「もう、ヴェーラったら」

緑のワンピースの少女が小さく吹き出した。そして言う。

「でも、教官の周りは、音も光も歪んで止まってたね」

「あははは」

白いワンピースの少女ーヴェーラ・グリエールは声を上げて笑い、緑のワンピースの少女ーレベッカ・アーメリングもそれにつられてケラケラと笑った。

二人はつい二ヶ月前に転入してきたばかりだ。その意外な転入生に、同期の学生たちは露骨に警戒感を示したものの、やがて無害であるとわかると積極的に接近してくるようになった。

「ねえねえ、ヴェーラちゃん」

「あのね、このところわかんなかったんだけど」

……こんな具合にだ。もっとも周囲に集まるのは女子ばかりだ。男子たちも遠巻きにヴェーラたちを見ていたが、女子たちが築いた分厚い壁によって、接近を阻まれて

いた。女子たちによって、二人の少女は神聖不可侵の何物かのように祭り上げられており、男

子との接触経路は完璧に絶たれていたのである。

「来週試験でしょ、だからちよつとサマリ手伝って欲しいの」

「えーとね、わたしは歴史とか経済とか哲学とか倫理とかは苦手なんだ」

めんどくさーというオーラを立ち昇らせながら、ヴェーラがにこやかに言った。その隣ではレベッカが少し頬を引き攣らせている。

「だからベッキーにお願ひしてくれるかな」

「え、ちよつと待ってよ。いつも私じゃない。それにヴェーラの方が説明上手でしょ」

この二ヶ月間で、もう何度こんなやり取りをしたのやら。レベッカは眼鏡のフレームの位置を直しながら、こめかみの辺りをヒクつかせる。ヴェーラはレベッカの肩をポンポンと叩きながら、周囲を取り囲む女子たちを見上げた。

「なんていうか、バシツと答えの出ない学問は苦手なんだよお」

「それは何となくわかる、けど……」

「さすがベッキー、話が早い！」

「え、ちよつと……!？」

まただ。またヴェーラのペースに飲まれてしまった。レベッカはその華奢な腕を組んで「うーん」と唸った。

「そうだ。ベッキーちゃん、ヴェーラちゃん、ジュース買つといたんだ」

女子の一人がグレイプジュースを二本、二人の目の前に差し出した。ちょうど喉が渴いていた二人はそれぞれに礼を言おうと、顔を見合わせて溜息をついた。

「餌付け、だね」

「餌付け、よね……」

レベッカはやれやれと首を振り、自分のタブレット端末を机の上に置き直した。

## ■ 01・01・02 》 教室の片隅にて

レベッカたちは揃って講義室の最前列へと移動した。レベッカは教壇に立ち、電子黒板を使って今の講義の要点を的確にまとめていく。ヴェーラは生返事をしながらその様子を眺め、時々鋭い質問をしてはレベッカを困らせた。しかしレベッカも負けてはおらず、教授以上に難易度の高い問い掛けをヴェーラに繰り出しては、ひそかに勝ち誇ったりしていた。

レベッカがサマライズを始めてから十五分が経った頃、ヴェーラは盛大に伸びをした。程よく眠気が到来したので、身体を目覚めさせようとヒョイと立ち上がって身体をぐるぐると回して――。

「あれ？」

その時、ヴェーラの視界の隅に真っ赤な何かが写り込んだ。講義室の最後列に、炎のような真っ赤な髪の女子が座っていた。彼女はヘッドフォンで何かを聞きながら、紙の本を読んでいて。ヴェーラは一瞬で、その鋭利な雰囲気の子に心を捕らわれた。ヴェーラは誰もが認める絶世の美少女ではあったが、この赤毛の少女は、まるで豹か何かのようなしなやかな獣性を秘めた美しさの持ち主だった。その燃えるような赤毛はもちろん、鋭い輝きを放つ深い紺色の瞳は、全ての光を吸い込んでしまうのではないかと思えるほどに深かった。ヴェーラを引き付けたのはその容姿だけではない。雰囲気――周囲全てを一切拒否しているようなオーラが、ヴェ

ーラの目を釘付けにしていた。

「ヴェーラ何してんの。ちゃんと……ってどうしたの？」

「え、ん、ううん、別に」

明らかに動揺しているヴェーラの視線を追って、レベッカもその女子に気が付いた。

「え……と？」

記憶にない顔だった。ヴェーラもレベッカも、一度見聞きしたものは忘れないという特殊な記憶力を持っている。その二人が覚えていないのだから、実際に初めて見る顔なのだろう。

事情通の女子が、その赤毛の女子をチラチラと見ながら言った。

「昨日だったかな、ユーマラの士官学校から転校してきたみたいだよ」

「なるほど、それなら知らないわけだ」

ヴェーラは納得しながらも、赤毛のその人から目を離せない。その事情通の女子は、少し早口で情報を追加した。

「あ、でもいきなり評判悪いよ。挨拶もろくにしないし、不愛想だしって。上級高等部からはもう目を付けられたとかいう噂だよ」

「噂はどうでもいいんだけど」

ヴェーラは無関心を装ってその事情通の言葉を中断させた。

「わたし、興味が湧いた」

「え、ちょっとヴェーラ。まだ途中なんだけど」

「続けてていいよ」

「ちよっと！　もう、勝手なんだから！」

レベッカの怒りの声も、ヴェーラの背中には届かない。ヴェーラはずんずんとその赤毛の女子の方へと近付いた。そしていざ声を掛けようというタイミングで、その女子はガタンと音を立てて立ち上がり、カバンを担いで足早にヴェーラの前を通り過ぎようとした。

「待って、赤毛さん」

声を掛けられ、その女子は溜息をついて立ち止まった。ヘッドフォンは着けたままだ。

「何の用だ」

「わたし、あなたに興味があったの」

「……なぜ？」

「興味湧くのには理由がある？」

ヴェーラはその蒼い瞳でまっすぐに赤毛の少女を見上げる。

「……アタシと関わってもロクな事がないぞ」

「赤毛さん」

「カティだ。カティ・メラルティン」

「あ、うん。カティ、あのね」

「いきなり呼び捨てか」

赤毛の少女——カティは知らず苦笑していた。そしてそれに自分で気が付いて、慌てていつもの仏頂面に戻す。

「わたしのことはヴェーラでいいよ。よろしく」

「……よろしくされるとは言っていない」

「どうして？」

どうして？

カティはその問いに驚いた。この流れなら、普通は「あ、こいつはヤバイ奴だから距離を置こう」となるものじゃないか。そして二度と話しかけてなんて来ないはずじゃないのか、と。

だが、目の前にいるこの美少女は、何の疑いもなく、その疑問文を口に出している。こんな人物に出会ったのは初めてだった。

「で、ロクな事がないって言ってたけどね。それを決めるのはわたしたち自身だよ。カティが決めることじゃないと思うよ」

「えっと……？」

「だから、よろしくね」

「……ところで、もう行っていいか？」

カティはやや狼狽<sup>うろた</sup>えながらも、それでもなんとか自分の対人防壁を守り切った。

「手ごわいね」

ヴェーラはにっこりと微笑んで見せた。カティはぐつと喉を鳴らして仰け反ったが、それでも折れることはなく、カバンを担ぎ直すと速足で講義室を出て行った。ヴェーラはほりほりと後頭部あたりを搔きつつ、レベッカの方を振り返る。レベッカや他の女子たちは、ヴェーラとカティの遣り取りを見守っていたようで、何事も起きなかったことに安堵の表情を浮かべていた。

ヴェーラは「ふられちゃった」と言いながら元の席に座り、レベッカに講義の続きを促した。

レベッカのサマライズはそれから十五分程度で終わった。教授に代わって講義すればいいのにとヴェーラは思ったが、その後のやりとりがなんだかテンプレっぽくなりそうだったので面倒になって口にしなかった。

「さて、と」

女子たちが一足先に講義室から出て行ったのを確認して、ヴェーラは立ち上がって軽く屈伸をする。今日はさっきの講義で最後であり、あとは寮に帰るだけだった。ヴェーラはレベッカの方へ顔を向けて首を傾げた。

「気になる、よね？」

「べ、べつに？」

レベッカはその質問の意図を察すると同時に、両手を振って否定した。だが、ヴェーラはそ

の表情の奥を読み取っていた。

「……気になってんじゃないん」

「なっていないわよ。明日だって同じ講義受けるんじゃない？」

「やっぱり気に」

「なっていないってば！」

「それじゃあ探しに行こう！」

「え、ちよっと、私の話聞いてた！？」

ヴェーラはいつもこんな調子だ。誰もがこうして強引にペースに乗せられてしまうのだ。しかしレベツカは、なんだかんだで乗せられてしまう自分がそれほど嫌いでもない。ヴェーラが暴走し、レベツカがブレーキを掛ける。二人はいつしかそんな具合に互いをあてにしていた。だが、レベツカが踏んだブレーキがヴェーラを止められた前例は今の所、ない。

「んじや行くよ、ベツキー」

「ちよっと、探すって言ったってどこを探すのよ？　もう帰っちゃったかもしれないじゃない」

講義は全て終わっているのだ。多くの学生は寮に帰っていることだろうし。

「帰っていないんじゃないかなー」

「何を根拠に……」

「紙の本持ってたんだよね、カティは」

「カティって人なんだ？」

「カティ・メラルティンって」

ヴェーラはカティの鋭利な表情を思い出しながら言う。レベッカは未だ釈然としていない。二人は荷物をまとめると、講義室から出た。

「紙の本って言ったって、図書室とは限らないじゃない」

「紙媒体ペーパーメディアの書籍って、基本的には学校からは持ち出しできないでしょ。だからどこかで読ん  
でると思うんだよね、図書室とか食堂とかで」

さしあたってヴェーラが向かっているのは図書室だ。学校から出る前に、絶対に一度は寄るはずだからだ。ヴェーラは図書室に顔を出すなり、傍にいた女性司書の一人に訊いた。

「すみませーん、赤毛の学生さん来ませんでした？」

声を掛けてきたのが小さな少女だったことに驚いて、司書は目を見開いた。

「ひよっとして、あなたがヴェーラ・グリエールさん？」

「そうですー」

ニコニコとヴェーラは肯定する。そして司書は後ろに立っていたレベッカにも声を掛けた。  
「とすると、そちらはレベッカ・アーメリングさんですね」

「はい。すみません、なんか……」

「いえいえ」

司書はにこやかにそう言うてから、「あ、そうだ」と最初に受けた質問を思い出す。

「赤毛の背の高い女の子のことですよね」

「そうそう。すぐ背が高い」

「まだ返しに来てませんねえ」

司書はデスクの方に戻って、一応返却履歴を確認してくれた。が、やはりヒットしていないらしい。

「昨日編入してきたみたいですけど、何か気になることでも？」

「ううん、探してるだけ」

ヴェーラは「そっかー」とか呟いてレベッカを見た。

「その辺探して来よう」

「えーっ、ここで待ってればいいじゃない」

「待ってるのつまんないし」

ヴェーラはそう言うのと、鼻歌交じりに図書室を出て行ってしまった。

「あ、ちょっと待ってよ！」

レベッカは司書に頭を下げつつ、親友の後ろ姿を追った。司書はその少女たちが見えなくなるまで出入り口の方を眺めていたが、やがてぼつりと呟いた。

「あの子たちが……」

経緯は全く知らないが、とにかく特例尽くしで編入されてきた少女たちだ。そもそも士官学校に十歳そこそこくらいの子どもが二人も同時に編入されてくる時点で、違和感しかない。一介の司書に過ぎない彼女にも、そのくらいはわかった。

「そ、あの子たちがかの有名な天才少女たちだよ」

司書の背後、貸出カウンターに一人の若い将校が立っていた。軍服を着てはいたが、ひよろりとした体型で、おおよそ軍人らしくない。ぼんやりと色の抜けた黒髪と、同じような色の目をした、これといった特徴のない風貌の青年だった。

「あら、ブルクハルト中尉、久しぶりです」

「たまには古典技術書でも読もうかとね」

カウンターのの上には、分厚い技術書が三冊、置かれていた。

「校舎外への持ち出しは出来ませんよ？」

「研究室で読むからさ」

「返却予定は？」

「明後日くらいでいいんじゃないかな？」

「……その量を？」

「一冊二時間もあれば読み終わるでしょ」

ブルクハルトは何でもない事のように言ったが、その書籍はそれぞれちょっとした辞書のような厚さがある。二時間で読み終われる代物とはとても思えなかった。

「僕は読むのが早いからさ」

ブルクハルトはさらりと自慢すると、書籍を持参してきた紙袋の中に丁寧にしたまった。

「それじゃ、また明後日」

ブルクハルトは右手を上げて軽く振ると、珍妙な鼻歌を歌いながら立ち去った。

「さすが技術士官。変人だわ……」

司書はそんな具合に、偏見に満ちた眩きを発したのだった。だが、ブルクハルトへの評価としては、それは至極真つ当なものだったかもしれない。

## ■ 01 | 01 | 03 》 接触

図書室を出たヴェーラは、レベツカを背後に感じながら、食堂の向かい側にある売店の方へと足を向けた。「なんとなくそっちの方にいそうな気がする」程度の直感めいた何かによる進路選択であったが、結果としてその直感は正解だった。

ヴェーラはレベツカの手を引いて、階段を下りて売店への曲がり角を曲がった。曲がればすぐそこに売店……というところで、「わきやーっ」とヴェーラは派手に吹っ飛んだ。後ろに引っ張られていたレベツカは間髪を容れず髪を回したものの、それでも大きくバランスを失った。

「まったく……前を見て歩くと習わなかったのか」

そこにいたのは、ずば抜けた長身の持ち主の赤毛の女子学生——カティだった。ヘッドフォンを外して、尻餅をついたヴェーラを助け起こしている。その表情は、露骨すぎるほどに迷惑そうだった。

「えっへへ、ごめんなさい」

その一方で、ヴェーラには全く悪びれた様子がない。助け起こしてもらい、お尻をパンパンと払いながら、ヴェーラは改めて右手を差し出した。カティは頭上に「？」マークを複数個飛ばした。

「握手だよ」

「……なんのために？」

カティは首からぶら下げていた小さな端末を右手で弄ぶ。ヴェーラはそれを目ざとく見つけ、背伸びをして顔を近付けた。

「あつ、A856だ。実物初めて見た」

「……形だけでわかるのか」

A856とは五年ほど前にリリースされた携帯音楽プレイヤーの型番のことだ。少しレトロな外見と、見た目にそぐわぬ頑丈さが売りの端末である。もちろん、強力なオンライン連携能力も有している。

「へへん、音楽関係ならかなりマニアだよ、わたし」

そう言つて胸を張るヴェーラ。カティは「やれやれ」と自分の頬のあたりを人差し指で搔いた。

「ともかく、痛い所はないか？ 怪我なんてしてないだろうな」

「お尻が痛いよ」

ヴェーラは自分のお尻をさすりながら言う。カティは鼻で息を吐く。

「そこは見てやるわけにもいかない」

「ぶふっ」

大真面目な顔で言われて、ヴェーラは盛大に吹き出した。その後ろではレベッカも微妙な表情で笑いをこらえている。

「……つたく」

カティはなにやらぶつぶつ言いながらも、二人の少女の頭をぐしゃっと撫でまわした。驚いて目を丸くする二人に、カティはそっぽを向きながら言った。

「周りの目もある。お前らに怪我させたとか、そんな噂を立てられるのは御免だ」

周囲には数名の学生がいて、彼らは例外なくカティの方を訝いぶかしげに見つめていた。

「……こういうのは本当に苦手だ」

カティは二人の手を引いて手近なベンチに移動した。そして二人を座らせて、自分はその前で腕を組んで仁王立ちになっている。傍から見ると、カティが二人の美少女を相手になげやらの説教でもしているように見えて、ますます心証が悪くなるのだが、カティはそのあたりの気配りには鈍感だった——というか、慣れていない。

「よし、大丈夫だな。それじゃ」

カティはなおも突き刺さり続ける周囲からの視線を煩げに払い除け、二人に背を向けようとした。が、その途中で右手をヴェーラに引っ張られてしまい、半分振り返った妙な角度で行動を止めざるを得なくなる。

「……まだ何かあるのか」

「わたし、ヴェーラ・グリエール」

いきなり名乗られて面喰うカティ。

「よろしくね、カティ」

「だから——」

「とにかくよろしく！」

被せるようにヴェーラが元氣よく言い放つ。カティは開いている左手でイライラと髪の毛を掻き上げて、ヴェーラの方を凝視した。カティはこういう手合いの人物と遭遇したことがなく、どういった対応をしたら良いのかわからなかったのだ。仏頂面のまま戸惑うカティの右手をしっかりとホルドし続けながら、ヴェーラが言う。

「わたし、来年は海軍の上級高等部に行くんだけど、今年と一緒に講義も多いよね。昨日転校してきたんでしょ？」

「あ、アタシは空軍の上級高等部だ。だから今年限りということになるな。……って、お前らは本当に高等部なのか？ いや、さっきの講義にいたということとは、そういうことなのか」

ぶつぶつと言っているカティを、ヴェーラはニコニコしながら見上げていた。その視線の直撃を受けていることに気付いて、カティはまた動揺してしまう。動揺だなんて、ここ十年は感じた事のない気持ちの悪い感覚だった。

「わたしとベッキーは、あ、こっちのメガネはベッキーって言うんだけど」

「ちょっと、ちゃんと紹介してよ」

ヴェーラの脇をつつきながら、レベッカが唇を尖らせる。

「あ、私はレベッカ・アーメリングって言います」

「あ、ああ。カティ・メラルティンだ」

「さっきはその、すみません」

ヴェーラ衝突事件の事を遠まわしに謝るレベッカである。カティは「それはいいんだけど」とまた口の中でぶつぶつと答えている。

「レベッカも海軍なのか」

「あ、はい。ヴェーラとはニコイチなんです」

「ベッキーで良いよ」

「ちょっとヴェーラ、どうしてあなたが私の呼び方を決めるの」

レベッカは眼鏡の位置を直しながら抗議した。その夫婦漫才のような様子を見て、カティは思わず表情を緩めてしまう。その変化を見逃すヴェーラではない。

「笑った！」

「わ、笑ってなんていない！」

カティは仏頂面に戻そうとして失敗する。レベッカのレンズ越しの視線に圧倒されていたからだ。

「ほら笑ったー。やっぱり美人さんじゃないかー」

「な、なにを言い出す」

「ムスつとしてるより、その表情の方がいいよお。わたしは好きだなー！」

「ぼ、ばかつ、意味が分からない」

カティは激しく動揺して、ヴェーラの手を振り払った。とにかくカティは、他人とこんなに近距離で接したことがない。少なくともこの十年間では記憶になかった。だから自然と挙動も不審になるというものだ。

「カティさん、私もその表情の方が良いと思います」

今度はレベツカがカティの手を取った。カティの逃げ出したい欲求が、限界まで高まる。

「さん付けはちょっと、いや、でも、呼び捨ては……」

「カティ、ねえ」

構わず呼び捨てにするヴェーラ。カティはグツと息を飲む。

「何聴いてたの？」

「えっ？」

「A856で何聴いてたの？」

「べ、別にどうってものでも」

と答えているうちに、ヴェーラは立ち上がり、カティの首から下げられているその端末を覗

き込んでいた。A856は今時珍しいディスプレイ内蔵型で、そのモノトーンのディスプレイに再生している曲名が表示されるようになっていた。

「へえ！　　こんなの聴くんのだ！」

「い、良いだろ、別に！」

カティは慌ててA856を握り締め、ヴェーラから隔離する。ヴェーラは「にひひ」と笑う。

「それ、百年くらい昔のラヴソングだよね！」

「だ、だからっ」

カティの白い頬が真っ赤に染まる。見開いた眼は、これ以上ないというほどの狼狽を物語っていた。

「そういうのが好きなんだ？」

「そんなの、いいだろ、どうでも」

妙な倒置法で返すカティを見て、レベッカが額に手を当てて首を振った。

「まただよ……」。

レベッカは心の中で呆れる。こんな怖そうな人でもあつという間に無力化してしまうだなんて、ヴェーラはなんて恐ろしい親友なのだろうかと。

レベッカの心の溜息をよそに、ヴェーラはカティの両手を掴んでぶんぶんと振っていた。カティはもうされるがままである。

「わたしは好きだよ、ラヴソング。まだ恋とか、たぶんよくは理解<sup>わか</sup>ってないけど」

真面目な表情で、やや目を伏せて言うヴェーラのその神秘的な様子に、カティは確かに目を奪われた。ヴェーラはそのプラチナブロンドの長い髪も相俟<sup>あは</sup>って、本当に天使が具現化したのではないかというほどに美しい少女なのだ。

「ラヴソングって、作った人の哀しきとか、苦しきとか、喜びとか……そんな経験がごちゃまぜになってると思うんだよね。楽しさだけじゃない。辛さだけじゃない。ラヴソングって、作った人の顔が、すごく立体的に見えてくる気がするんだよ」

独特な表現で語るヴェーラに、カティは「お、おう」と頷くしかできない。

ヴェーラとレベッカにとって、『音』というのは映像だった。二人は特殊な感性——能力<sup>ちから</sup>と言っても良いかもしれないが——の持ち主で、『音』が色や匂い、場合によっては映像に見える。とにかく常人の何十倍もの情報量を持つものとして処理することができる。だから二人の少女にとって、『音』というのは、ましてそれが体系的に複雑に組み合わせられた『音楽』というものは、とても重要なキーワードだった。

「歌が好きなんだね、カティは」

「どうしてわかる」

「このラヴソングに辿り着いて、そして聴いてるってことは、かなりの音楽情報通だったことだもん」

ヴェーラの迷いのない断定に、カティはまた言葉に詰まった。それは事実だったからだ。

「……独りになるのが好きだからな」

だから音楽を聴くことで、周囲から隔絶されていようとしている。

その言葉を受けて、ヴェーラは何度か頷いた。カティはその意味が分からず首を傾げる。

「カティは人づきあいが苦手なんだね」

「……だろうな。って、なんでアタシは初対面のお前相手にこんなことまで喋らされてるんだ」

我に返ったカティは、左手首の時計を確認した。

「今日はここまでだ。本を返さなければならぬ」

「えーっ」

「えーも何も無い。図書室で調べ物もしなけりやならない。徹夜は勘弁だ」

レベッカは売店の傍にある大きなデジタル時計を見て、ヴェーラの肩に触れた。返却手続き

窓口の閉鎖時間が迫っていた。

「ということよ、ヴェーラ。困らせちゃダメよ」

「だってさあ、せっかくう」

「だってもなにもありません。ヴェーラ、行くわよ」

レベッカはヴェーラの腕を引っ張った。が、ヴェーラは動かない。

「そうだ、せっかくだから図書室についてー」

「あ、明日も一緒に講義があるだろう」

ついてこられてはたまらないと、カティはヴェーラの発言に被せるようにして言った。ヴェーラは「我が意を得たり」とニヤリと笑い、サツと右手を上げた。

「じゃあ、まだお話ししよう！」

「お、おう……」

勢いに押されて思わず了解してしまうカティであった。そして次の瞬間、その自身の失策に気が付き、顔に手を当てて頭を振った。が、その手に隠された表情がどこか楽しそうだったのを、ヴェーラとレベッカは見逃さなかった。

「そ、それじゃ、明日な」

カティは逃げるように背を向ける。ヴェーラは周囲の目も気にせず、ぶんぶんと右手を振った。

「またねー！」

カティは振り向きもせず右手を上げて去って行った。ヴェーラはその姿が見えなくなるまで手を振り続け、そして呟いた。

「かっこいいなあ……！」

「そうね」

レベッカも同意する。二人が接してきた大人や学生に、あそこまで芯の通った人物は早々見

当たらない。そして二人はまた、カティの中にある何か、薄々気が付いていた。普通の人ではまずありえない何か、カティの中に朧げに見えていたのだ。

「それにしても、ヴェーラ」

「んー？」

二人は手を繋いで寮に近い出口へと向かって歩き出す。レベツカはやれやれと頭を振りながら言う。

「あなたのあれ、才能よね……」

「なにがああ？」

ヴェーラはどこまでも自由奔放であった。

## ■ 01 01 04 ≪ ベルヴェルク

広大な執務室の奥、一つしか置かれていないデスクにて、青年——ジョルジュ・ベルリオーズは目を閉じて頬杖をついていた。眠っているわけではない。その表情は楽し気にも見えませんが、どこか昏い雰囲気も纏っていた。ベルリオーズの放つ退廃的なオーラが、客観的にそう見せているのかもしれないが。ベルリオーズはふと薄く目を開けた。その左目が不規則に赤く明滅している。

「そう——」

ベルリオーズはゆっくりと立ち上がり、ゆっくりと腕を組んで、背後にある窓のようなものの方を向いた。

「無事に接触できたわけか」

ふむ、とベルリオーズは頷き、窓のようなものの外を見ている。そこにあるのは虚空であり、つまり、闇だった。月も星もない夜空よりさらに暗い、あらゆる気配、というものから隔絶された部屋——それがベルリオーズのいる場所だった。

「滞りなく、ねえ」

彼はどうやら何らかの報告を受けているようだった。だが、電話をしている様子もメールをしているようなそぶりもない。全ては彼の脳内で処理されているようだった。

「……ということは、彼女はミスティルティンにはなり得ない、ということが確定したわけだ」  
ベルリオーズは再び椅子に座り、背もたれに身体を預けた。

響応統合構造体とはいえ。

ベルリオーズはその姿勢のまま、少し思案した。

やはり、次の子たちに期待することになるのか。初代で巧く行けばという期待はあったのだが、こうなることも想定の内ではあった。そのための鍵はもうすでに準備してあることだし。ただ少し遠回りになっただけだ。

「どっちにしても、簡単には、いかないか」

それはそうだろうな、とベルリオーズは思う。あの悪魔にティルヴィングを与えられたとはいえ、そう易々と事が運ぶとは思えない。なぜならそれでは、あの悪魔的には「面白くない」からだ。

だが、その悪魔を出し抜く手段はある。

ベルリオーズ自身が『ヴァラスキャルヴ』の領域から外に出て、要素たちに直接的な干渉を行えば、或いは事は簡単に運ぶかもしれないし、おそらくたぶんそうなるだろうなという感触が彼にはあった。ただそれは、彼自身が禍を引き起こす者としての役割を演じなければならぬということであり、それは彼自身の目的とはそぐわない。だから、なるべくならばそのカードは切りたくないというのが彼の本音だった。ベルリオーズとしては、自分は常に

ヴァラスキャルツ  
オーディンの館の中にいるべきだと考えている。願わくば、最後まで。

「ギンヌンガの奈落は目前に開いているというのに」

青年は一人呟く。

「肥大化したイミルは、僕らを墮落させるだけなのだが」

なぜ人はそれに気付かない？

なぜそれに対して肯定も否定もしない？

「僕は——」

青年は複数の視線を感じて、天井を見上げた。

「僕はね、オーディンなんかにもなりたくはないのさ。君たちの意には反するのだろうけど」

しかし事態は着々と進んでいく。進められていく。

その現状に抗うためにベルリオーズが目を付けたものこそ、響応統合構造体であり、歌姫

という概念だった。

「僕は世界の創造をしたいわけじゃない。世界の再生を見たいんだ。わかるだろ」

ベルリオーズが語り掛ける先は、天井という名の虚空だ。そしてその答えは彼にのみ届く。

その答えを聞き届け、ベルリオーズはやれやれと首を振り、わざとらしく肩を竦めた。

「僕はその態度が気に入らない。世界、意志、そして僕たちを、君たちはそうやって使い捨て

てきた。盲いたファウストをそうしたようにね。でも」

ベルリオーズの左目が一層強く輝いた。

「僕は君たちを見つけ出した。だから、僕は君たちの好きにはさせない。ティルヴィングを僕に与えたことを、君たちはきつと後悔するだろう」

そう言い捨て、ベルリオーズは広大な部屋の中央に、立体設計図のようなものを映し出した。それは戦艦のような形をしていた。

「女神よ、怒りを歌いたまえ……か」

ベルリオーズは『イーリアス』の一節を抑揚なく詠った。

■ 01・02 》十年は遠く

■ 01・02・01 》焦げ付いた記憶

ヤーグベルテ中央連盟の誇る四風飛行隊——ノトス、エウロス、ボレアス、ゼピュロス——は世界最強の機動兵力であり、誰もがそれに疑いを持たなかった。対して、ヤーグベルテ中央連盟と長らく戦争状態にある、アーシユオン共和国連合は、艦隊戦力の強化を最優先に行っており、海戦の雄としての地位を確固たるものとしていた。

ヤーグベルテ中央連盟の基本思想は、歴史的に、専守防衛である。よって、航空母艦による機動的な兵力運用の必然はないと信じられてきていたし、事実、四風飛行隊の八面六臂の活躍によつて、国土は維持されてきた。だがしかし、ここ数年間、ヤーグベルテは現状維持路線を貫いていた一方、アーシユオンは国防予算を数倍にまで押し上げ、海軍戦力のさらなる拡充を図っていた。

それに対して、ヤーグベルテの軍拡派の動きは早く、国民の危機感を見事に煽り立て、見る間に軍拡世論を形成した。ヤーグベルテの軍指導部はその流れに乗り、全十三個艦隊すべてを空母機動部隊として再編したのだった。無論、空母は安い買い物ではない。だが、それに関しては、ホメロス社が中心となって協力を申し出た。その結果、ヤーグベルテは格安で試作大型空母を二ダースほども手に入れることができたのだった。

どう考えても予定調和じゃないか。

カティは頬杖をつきながらページをめくる。カティは紙媒体が好きだ。理由は特にない。最近ではあらゆるものが電子媒体のみでの配信となってしまうていて、新刊が紙媒体で出てくることはほとんどない。軍のパンフレットにしたって、ほとんどが電子媒体だ。

ホメロス社といえば、次期主力戦闘機F108・パエトーンの製造元だったよな。

カティは延々と続く軍備拡張の内訳表を眺めている。その中でも目を引くのが、ヤীগベルテ最強と言われている第七艦隊の旗艦・ヘスティアだ。そのスペックがほとんどが秘匿情報となっていて、艦載機の搭載量はもとより、排水量すら公表されていない。

第七艦隊といえば、『潜水艦キラー』クロフォード中佐のいる艦隊だったな。

カティは記憶をフル活用して情報を関連付けていく。身体を動かしているか、こうして軍の情報を頭の中で整理しているか、小説を読んでいるか。カティは大抵このどれかを、音楽を聴きながら行っていた。他のことにはまるで興味が無い。——講義の予習・復習だけは、仕方なくやっていたが。

視線を上げると、例によって教室の前の方でヴェーラとレベッカが女子たちに囲まれている。今日の講義はおさらいが必要なほど難しかっただろうか、とカティは心の中で首を傾げている。予習さえしていれば難なく理解できるレベルだと思ったのだが、と。

今日はさっきの講義で最後だった。だからなんとなく教室の後ろの隅で、朝のうちに借りて

きた書籍を読んでいた。ヴェーラが講義の前に「あとでね！」と声を掛けてきたので、律儀に残っているというわけである。

教室には西日が差し込んできていて、床や壁を金色に照らしていた。十月の日暮れは早い。そして教室は少し冷えてきていた。雪の季節にはまだ早いだろうが、それも遠からずという具合の予想気温になっていた。先日までカティはユーメラという冬とは縁遠い南方の都市にいたので、この寒さは正直堪えた。今日も朝起きるなり辟易したものである。昨日の今日の事で、コートはまだ買っていない。いや、中央政府に打診すれば何か届けてくれるのかもしれないが、それは何となく癩しやくだった。

でも、冬はいいものかもしれない。カティはまだ直接は見た事のない雪に思いを馳せる。カティは南国生まれの南国育ちであったから、冬への憧れも少なからずあったのだ。いや、生まれた村に『冬』なんてものは全く存在しなかったからこそ、そう感じるのかもしれない——そんなことを思うと、心の底がじくりと疼うずいた。

カティは溜息をついて、ヘッドフォンから聞こえてくる音楽に意識を乗せた。それは「十年後の自分」に向けて送る歌だった。この歌を作った人は、きつともう亡くなっているんだろう。なにせ七十年以上も昔の曲だからだ。この歌を世に出してから十年後、この人は十年前の自分をどう思ったんだろうな、などと想像してみる。

「十年前……」

忘れもしない八歳の頃に遭遇した事件——思い出したくもない。

カティは頭を振った。その瞬間、ヴェーラと目が合った。ヴェーラの表情は少し曇っているように、カティには見えた。だが、それを踏まえても、夕日を受けて輝いているヴェーラの姿は、いつそ神々しくすらあった。思わず視線を奪われて、カティは十数秒に渡ってヴェーラを凝視してしまった。ヴェーラもまた、視線を外さずにカティをじっと見つめていた。その表情は、何故か泣く直前のそれに見えた。

カティは口の動きだけで「なんでもないぞ」と伝え、ヴェーラは「わかった」と頷いて視線を逸らした。だが、その美しい白磁の横顔は、これ以上ないというほど憂いに満ちていた。それもまた、幻想的に過ぎるほどに美麗だった。

不思議な子たちだ。

カティはつくづく思う。まだ出会って二日しか経っていないのに、まるで何年も一緒にいたんじゃないかというくらいの距離の近さだった。カティ自身驚いていたが、二人に関してはカティのパーソナルスペースに踏み入ってきてても不愉快にはならなかった。コミュニケーションの苦手なカティだったが、「もっと来たって良い」と密かに思ってしまうくらいだった。

今日は講義が丸被りしていたので必然的に一日中一緒にいることになったのだが、二人は本当に不思議なパーソナリティの持ち主だった。

二人は何も否定しない。肯定に肯定を重ねて、批判も非難もしない。何もかもを受け容れて

いるようにも見える。

それがカティには心底不思議だった。どうしてそんなことができるのか、カティにはまるで理解不能だった。

そうして受け入れた連中の誰かが、お前たちを裏切ったら？　それでもまだ受け容れ——つまり信じ続ける事ができるのか？

カティは本に視線を落としていたが、内容はさっぱり頭に入ってきていない。

信じて裏切られた時の気持ちとか、信じていたものが失われた時の絶望とか……お前たちは知らないのだろう。自分の知らない所で自分を指差して晒っている者がいると知った時の、あの膿んだような痛みも知らないのだろう。満たされていたものが突然消えてなくなった時の……。何の力も持たない自分を突き付けられた時の……。

カティは「はぁ」と息を吐きながら頭を振った。そして本を閉じて、椅子の背もたれに背骨を押し当てた。

昔のことなんて、どうだっていいじゃないか。

アタシの昔のことなんて——。

カティは眉間に深い縦皺を寄せながら、首の後ろで手を組んで、目を閉じた。

## ■ 01 02 02 》 見えてしまった過去

カティはそれから辛抱強くヴェーラたちを待ち続けた。目を閉じ、ヘッドフォンで耳を塞ぎ、音楽を流して外部の音を完全にシャットアウトして、ヴェーラたちが話しかけてくるのを待った。

目を閉じていると時間の経過が遅くなる気がする。だが、それから実際に経過した時間はわずかに二曲分だった。

気配を感じたカティは億劫そうに瞼を開いた。すると目の前にヴェーラが座っていて、その傍らにレベッカが立っていた。

カティはやや慌ててヘッドフォンを外し、教室の出入り口あたりで様子を窺っている女子たちをその鋭い視線で一舐めした。それだけで彼女らは黙ってその場から退散していく。ヴェーラに視線を戻すと、何故か酷く憂いに満ちた顔をしていた。目が合ったヴェーラは、少し微笑む。見た目の年齢に似合わない、重く謎めいた微笑だった。

「おまたせ」

ヴェーラはそう言ったが、さっきまでの弾けるような元気さは、その中には感じられなかった。沈鬱な倦怠感のようなものがカティにダイレクトに伝わってくる。自分が何かしたのかと、カティは自分の行動を顧みたりもする。

「違うよ、カティ。カティが悪いんじゃないよ」

ヴェーラはまるで心の中を読んだかのように、そう言った。傍らのレベッカは、眼鏡越しに少し困ったような表情を浮かべていたが、何も言わなかった。

「じゃあ、どうしてそんな」

暗い表情をしている？

カティは訊こうとしたが、何故か声が掠れて後半が言葉にならなかった。そもそも他人の領域に踏み込むことが得意な性分ではないのだから、これは仕方のないことなのかもしれない。た。

「あの」

レベッカがおおずと口を開く。が、それはヴェーラの上げた左手で制された。

「わたし、どうしてもカティとお話しなくちゃならない」

「うん？」

カティは意味が分からず、ヴェーラをただ凝視する。ヴェーラは椅子に座り直すと、膝の上で両手を握りしめた。その上目遣いの蒼い瞳がカティを捉えて離さない。カティはまるで裸で二人の前にいるんじゃないのかと思うほど、羞恥心のような何かを感じていた。

「さっき、カティもすごく暗い顔、してたよね」

「……そうかもな」

あんなことを思い出したわけだし。無理もない。

カティは大きく息を吐いた。ヴェーラはレベッカの右手を左手で握りながら、「それで——」  
と震える声で言った。

「見えたの」

「見え……た？」

カティは思わず唾を飲み込んだ。文字通りに心臓が跳ねたような、そんな感触を覚えた。

「見えた。見えたんだ。見えちゃったんだ」

ヴェーラはそう繰り返した。そしてまたカティの紺色の目を覗き込み、とろとろ訥々と呟くようにして尋ねてきた。

「ねえ、あれはカティが見てきたこと？ 見てきたもの？」

「ヴェーラ？」

レベッカもその様子に困惑しているらしい。声を掛けたレベッカに、ヴェーラがどこか荒すさんだような微笑を浮かべた。

「ベッキーにも見えると思うよ。音楽聴いた時みたいに、わたしには見えた」

「え……」

レベッカはカティの目をじっと見詰めた。カティは金縛りにでもあったかのように、身動きができなくなる。全身を鎖で縛られて、脳みそを直接ひっかきまわされているみたいなの、不快

感というか不安感のようなものがカティの中に生じてくる。カティの視界の中心には、レベツカの瞳があった。その新緑色の瞳は底が見えないほど深く、そう、言うなれば奈落のようだった。そうと気付いたカティは、胃の辺りに冷たく重たいものがのしかかっているような、そんな感觸を覚える。

「なんだよ、それ……」

心の中でも読まれているのだろうか？

カティは全身の鳥肌を何とか取り繕おうと必死になる。そんな非科学的なことがあってたまるか、とは思うが、この子たちなら或いは——ヴェーラとレベツカは、そう思わせる何かを持っている。

「ヴェーラ、これは」

レベツカの声が掠れていた。

「これは触っちゃダメなものよ！」

「……ごめん」

思わず大きな声を上げたレベツカに向けて、ヴェーラは頭を下げた。白金色の髪が、揺れてキラキラと輝いた。そしてカティに向かっても頭を下げる。

「ごめんね、カティ」

「えっと」

カティは戸惑っていた。あの天真爛漫を地で行っているようなヴェーラが、今はこれ以上ないというくらいに深く澱んだ空気を纏っていたからだ。

「見えるというのが分からないが」

カティは心拍を落ち着かせようと努めながら、何とか声を出した。

「そう、まだピンと来ていないんだが、その、見たくて見たわけじゃないんだらう？」

「うん」

頷くヴェーラの大きな瞳から、唐突に大粒の涙が零れ出た。最初の一粒が流れ落ちたのを合図に、堰を切ったように溢れ出す。口元が小刻みに、肩が大きく不規則に揺れ動いていた。しゃくりあげながら、小さな手で頬を拭っている。険しい表情のレベツカがハンカチを手渡し、ヴェーラはそれを握りしめて泣きじゃくる。カティはこの状況の急変に戸惑うばかりだった。撫でてやろう、とは思うのに、少しも腕が動かない。

「ごめんね、カティ」

「……いいんだ」

そうか。

カティは深く息を吐いた。少しだけ楽になった気がした。

もしかしたら、本当に見えたのかもしれない。アレが。

十年前の自分の記憶。

小さな漁村の光景。

煤のように心の奥底にこびりついた、焼けるような空気と、悪臭。耳が聞こえなくなっ  
てしまふほどの、轟音。叫び。断末魔。

薄暗くなった教室の中、号泣するヴェーラの向こうに、カティはその風景を再び呼び起  
こして  
いた。

## ■ 01・02・03 》 十年前の記憶

それはちょうど十年前、二〇七一年の晴れた夏の日だった。

当時八歳のカティは、辺境の小さな漁村に住んでいた。その日は雲一つない快晴で、轟然と降り注ぐ陽光に、砂浜も家々も海すらも焼かれていた。大人たちはその暑さに辟易していたが、カティら子どもたちは、いつものように元気に海岸線を走り回って遊んでいた。カティはとりわけ二つ年上の兄、そして一つ年下の妹と遊ぶことが多かった。その上にも年の離れた姉と兄がいたが、二人はもう大人扱いをされる年代だった。

村の規模は人口三百人程度で、戸建ての家は海岸線に密集するように並べられていた。どの家も築五十年以上で、老朽化が傍目にもよくわかるほどだった。一言で言えば、枯れた雰囲気村だった。かろうじて公営のバスが都市部とのパイプを形成してはいたが、それも一日に僅か二往復しかしておらず、孤立集落と言っても差し支えない不便さだった。

そして地形学的には、宿敵であるアーシオンの本土に最も近く、沿岸に双方の軍の軍艦が見えることすら度々あった。海戦が行われた結果、大量の死体が流れ着いたなんてことも、ここ十年だけ見ても、一度や二度ではない。そんな物騒な位置にあり、海軍兵士の死体で埋め尽くされた海岸の写真なんかもネットに出回ったりしている村に、新たな移住者が出てくるはずもない。そんな事情で、村は寂さびれる一方だった。

その日の二日前にも、村から二百キロほどの場所で小規模な海戦が発生していた。多くの遺留品が流れ着き、その中にはもちろん亡骸も多数あった。大人たちはカティイら子どもたちに、「しばらくの間は海岸には近づくな」と強く言いつけたのだが、好奇心に突き動かされる年代の子どもたちにとっては、それは「行ってこい」というのとさして意味は違わなかった。

「待ってよ、お兄ちゃん」

カティイは棒切れを振り回して先を行く兄の背中を追う。そのカティイの後ろを七歳の妹が駆けまわるようにして追いかけてくる。それは珍しくもない、いつもの光景、いつもの行動だった。

「あれ？」

でもその日は何か違った。猛烈な日差しに向こう、焼かれた砂浜の上に、誰かが座っているのが見えた。カティイの兄は棒切れをまるで剣のように構えながら、慎重にその人影に近づいていく。

「お兄ちゃん、あれ、アーシユオンの軍服じゃない？」

「そうだな」

「お父さんたちに報せに行こうよ」

「いや、逃げられたら困るじゃないか」

十歳の少年は棒切れを振り回しながら主張する。カティイはその兵士から目を逸らさず、だが、兄に反論する。

「お兄ちゃんじゃまだ兵隊には勝てないよ。お父さんたちのところへ行こうよ」

口論が始まろうとしたその時、座り込んでいたアーシュオンの兵士が立ち上がった。しまったと思つた時にはもう遅い。ここは身を隠す場所もない砂浜だ。逃げるにしても百メートルも離れていない。カティ達は所詮は子どもだ。簡単に追い付かれてしまうだろう。

「氣付かれたよ、どうするの」

カティは妹の手をしっかりと握りながら、兄を責めた。兄はバツが悪そうな表情をしながらも、手にした棒切れを離さない。ちよつとした木刀くらの長さで重さのある棒切れは、まともに使えば武器にはなるだろう。だが、それが兵隊相手に通じると言え、カティには甚だしく疑問だった。

その兵士はゆつくりとカティ達の方へ顔を巡らせ、一歩、二歩と近付いてきた。カティの兄は棒切れを構え、「近付くなー」と叫んだ。あわよくばその声が村の方まで届いてくれればと思つたのだが、男が五十メートルの所まで近付いてきても、家からは誰も出てくる氣配がない。この暑い日の真昼間だ。大人たちは締めきつた家の中でエアコンの冷風を愉たのしんでいる頃だろう。

「そこで止まれ！」

カティの兄は棒切れを振り回しながら怒鳴つた。カティは妹を後ろに隠す。しかし兵士は立ち止まることなく、両手を軽く上げながらも近付いてきた。

「敵意はない、のかな？」

兄が疑問文を投げかけてくる。が、そんなことはカティにわかるはずもない。武器を持っている可能性だってなくはないし、相手がナイフの一本でも持つていれば、その時点で詰んでしまうだろう。

兵士はなおも近付いてきて、その距離は十メートルほどにまで縮まった。そこまできて、ようやく兵士は立ち止まった。兵士は痛んだ軍服を着ていたが、その様子から察するに怪我らしい怪我はしていないようだった。栗色の髪に、緑の目、そしてどこか捉えどころのない表情をしていた。

「ここはどのあたりだ？」

兵士は流暢なヤーグベルテ公用語で話しかけてきた。カティたち辺境に住むヤーグベルテ人の言葉なんかよりも、はるかに洗練された発音だった。カティの兄が答える。

「ユーメラのアイジス村」

「ユーメラか……」

兵士は目を細めて繰り返し続けた。ユーメラというのは、ヤーグベルテ国家群を形成している国家の一つであり、アーシュオンからの国土防衛の要となる軍事強国である。

「アイジス村というのは？」

兵士の問いに、カティの兄は砂浜に簡単な地図を書き、その一部に丸印をつけた。

「この辺」

「……とすると、俺たちが戦ったのがこの辺か」

兵士は海の部分に右足の爪先で×印を書く。

「敵でしょ、おじさん」

「確かにアーシユオンの兵隊だけど、武器は全部流されてしまったよ」

確かに、武器を隠す余地はなさそうに見えた。が、相手はそれほど屈強ではないとはいえ兵士。十歳の少年が棒切れを持っていたとしても勝負にならないだろう。カティは兄のシャツの裾を引っ張る。

「お兄ちゃん、お父さんに報せようよ」

「でも」

「俺の捜索隊が来るまで黙っていてくれたら、お礼をするよ」

「お礼？」

兄はたちまち好奇心を刺激される。兵士は柔らかな微笑を見せて、頷いた。

「俺のこの階級章とか、捜索隊の持ち物からも何かあげよう」

「お兄ちゃん、ダメだよ、大人に報せないと」

「でもカティ、この人は武器もないし、大丈夫だと思う」

カティの兄は好奇心に負けていた。カティは妹を背中に庇いながら、とても懐疑的な視線を

兵士に向ける。兵士はまた両手を上げて、敵意がないことをアピールしている。

「隠れるのに良い場所なんて知らない？」

「えっと」

「お兄ちゃん！」

「うるさいなあ、カティは」

カティの兄は煩げに棒切れを振った。カティはムスツとして口を閉ざす。そうこうしている間に、兄は兵士を連れて、村はずれの空き家へと案内してしまう。カティ達が物心ついた時にはすでにその地区は軒並み空き家だったので、外壁も窓もボロボロだったし、庭には雑草が生い茂っていた。早急に取り壊す必要もなかったことから、また村の予算の都合から、まるで幽霊屋敷のような佇まいであるにも関わらず放置されているというありさまだ。周囲にはそんな家が十件近くも立ち枯れている。隠れ家とするにはもってこいの場所だった。

「これはいい場所だね。しばらくはここで過ごせそうだ」

食事や水の問題は、その空き家の庭にカティの兄が作っていた「秘密基地」が解決した。そこには漂着してきた保存食や長期保存用のボトルに入った水の類が大量に備蓄されていたからだ。

さしあたりの生活が可能だということが分かり、気を良くした兵士は、自分の襟章をカティの兄に渡したのだった。

とりあえず危険な人物ではなさそうだし、第一この人と揉め事を起こしたら、「助けに来る」人たちが村に何かをしないと限らない。事が起きてからヤーグベルテの軍が派遣されたとしても、おそらく間に合わないだろう。カティは幼いながらも、そんな風に考えた。カティが導き出した結論は、「おとなしく言うことを聞いて、何事もなく立ち去ってもらうのが最善だ」ということになった。

## ■ 01・02・04 ≪ 敵国人との交流

それから三日もすると、カティもすっかりその兵士に心を許すようになっていた。兄を差し置いて一人で会いに行くなんてこともあるくらいに。

兵士はヴァシリーと名乗った。その柔和な顔に、無警戒な笑顔を貼り付けて、ヴァシリーはカティに、アーシュオンについての様々なことを教えた。もともと、十年後のカティは、この兵士から聞いたことはほとんど何も思い出せない……そんなレベルの他愛のない情報ばかりだったのだが。それでも、幼いカティにとってはその ことごと 尽くが物珍しく興味深い話だった。カティは夢中で話をせがみ、ヴァシリーはその要求を一度とて拒むことなく、カティに様々な情報を提供したのだった。

ヴァシリーによれば、あと一週間もすれば救出部隊がやって来る、ということだった。通信手段の一つも持たないヴァシリーがそんなことを知っているはずもないのだが、幼いカティはその話を疑いもなく信じた。何せ辺境の地に生まれ育った八歳の少女である。世間知らずなところがあっても、責めるわけにはいかなかっただろう。

ヴァシリーと出会って五日目の夕方、太陽がほとんど西の山影に沈んだ頃に、カティは一人、うきうきとした足取りでヴァシリーの隠れている空き家に向かっていった。つい二時間ほど前に、海岸でアーシュオンのものと思われる缶詰が大量に見つかったのだ。それを届けに向か

っていた、というわけだ。

「あれ？」

ベランダの破れた窓から中を覗いてみるが、人の気配がない。

もしかしてもう救出部隊がやってきた後？

そんなことを想像して、カティは少しだけ気落ちした。カバンに詰め込んだ缶詰を一つ取り出して、その見慣れない文字を上げ上げと見まわした。せつかく拾ってきたとはいえ、ヴァシリがいないのでは仕方ない。

「もう暗くなるし」

と、カティは諦めて立ち去ろうと立ち上がった。家の敷地を出たあたりで、カティは別の空き家から出てきたヴァシリと遭遇する。

「ああ、来てたのか」

「どこ行ってたの？」

「ん、ほかの家も見てきたところ。暇だったからさ」

「村の人に見つかるよ？」

カティはそう言いながら、カバンから缶詰を一つ取り出した。

「はい、これ、拾ったの」

「ありがたい」

ヴァシリーはそう言って、缶詰を受け取った。太陽を背にしていたので表情は良く見えな  
い。

「まだたくさんあるよ」

「ありがとう」

ヴァシリーとカティは二人で隠れている空き家へと移動する。その秘密の行動が、カティに  
は楽しかった。大人たちに黙って敵の兵士を匿っている。そのことに、どこか背徳的なスリル  
のような高揚感のような、そんなものを覚えていた。

「ところで君は」

家の奥から缶切りを持ってきて、ヴァシリーは言った。

「この村から出たいと思ったりはしない？」

「村から？」

「そう。もっと都会に、便利な場所に」

「そうだなあ……」

カティは夕陽を横顔に受けながら思案する。

「みんながいるなら行ってもいいかな？ 一人だったらヤだ」

みんな、とは、家族や友達のことを指していた。

それを聞いたヴァシリーは、少し困ったような表情を浮かべながらも、黙って缶詰の蓋を切

り開けた。中に入っていたのはビーフシチューだった。電子レンジの類もないし、火を使うわけにもいかなかったので冷たいまま食べるしかなかったが、それでも缶を開けた瞬間から漂い出してきたその香りに、カティは空腹を覚えたのだった。

その様子を見たヴァシリーは、缶詰とスプーンをカティに差し出す。カティは遠慮がちにそれを受け取ると、初めて食べる軍用の糧食を緊張しながら口に運んだ。

「……美味しい」

「だろ。アーシユオンの戦闘糧食ミリメシは意外とイケるんだ」

二人はカティが持ってきた大量の缶詰の幾つかを消費しながら、アーシユオンの都市部で流している歌やファッションについて話をした。インターネットが普及している現在、(幼いなりに)「文化には国境はない」と思っていたりもしたカティだったが、実際にその文化圏の人物から話を聞くと、その流行の感じ方にはずいぶんと温度差があることがわかった。

「あ、そろそろ時間。帰らないと」

つい夢中になって時間を忘れていた。気が付けば周囲はすっかりと暗くなってしまう。両親が心配して探しにくるかもしれないし、もしかしたら兄がヴァシリーの事を話してしまいかもしれない。そう思って急に不安を感じたカティだった。

「気を付けて」

ヴァシリーは真っ暗な家の中に引っ込みながら、カティに声を掛けた。カティは手を振りつ

つ、黙ってその敷地から出て、家路を駆けた。

その途中、カティは何かが闇の中を追いかけているような気がして、何度も振り返った。走り慣れた砂の地面なのに、何度も足を取られて転びかけた。今までこんなに不安になったことは無い。周囲が暗くなってしまうたとはいつても、この海岸一帯はカティにとって庭みたいなものだったからだ。

ゾクつとするような、そんな視線を背中に感じて、カティはついに足を止めた。家までもう少しだったのに、息が上がってしまったって足を止めざるを得なかった。「この海岸、こんなに長かったっけ」と思ってしまうほど、家が近付いてこなかった。

恐る恐る振り返った先には、ただ闇と潮騒があるだけだ。空には薄く雲がかかっている、星はほとんど見えなかった。月の姿も見当たらない。

「だれ？」

カティは震える声で闇に呼びかける。だが、それが返事などするはずもない。カティは目が回るような不安にのしかかられ、そしてこれが「恐怖」という感覚なのだと思える。名状し難いモノ、それが確かに闇の中に潜んでいて、自分の事をじっと見つめているのだ。

カティは身動きが出来なかった。指先すら動かさず、ただ膝が意志とは無関係に震えているのみだ。その金縛りのような状態を解いたのは、二歳年上の兄だった。

「カティ！　こんな時間まで何やってんだよ！」

「お、お兄ちゃん！」

カティは残る力を振り絞って、声の方向へと駆けた。兄の顔が視認できるところまでやってきた時、全身からべとついた汗が吹き出して、同時に涙も出た。

「ヴァシリーのこと、バレちゃうぞ！」

「ごめん」

カティは泣きながら謝り、兄と共に言い訳を考えながら、今度こそ家路についたのだった。

## ■ 01・02・05 向けられた銃口

翌日、カティは外の喧騒で目を覚ました。悪い予感と共に飛び起きたカティは、部屋を出て階段を駆け下りた。階下では両親が険しい表情で身支度をしていた。

「ど、どうしたの……?」

恐る恐る訊くカティに、父が答えた。

「アーシュオンの兵士が見つかった」

「えっ……!!?」

「あなた、やっぱり電話が繋がらない」

母が携帯端末を操作しながら焦ったように言う。

「父さん、やっぱりダメだ。ネットも死んでる」

年の離れた兄が居間に顔を出して言った。その顔には緊張がうかがえる。カティと、やや遅れて起きてきた二歳上の兄はおろおろとするばかりだった。妹は姉と手を繋いで不安げに家族の顔を見回していた。

「兵隊は捕まったの?」

「捕まえた」

父が短く答えた。母がそれに補足する。

「でも、外と連絡がつかなくなってるのよ。だからどうしたらいいのかって、騒ぎになってる  
ところ。駐在さんも昨日から姿が見えないし」

事件が起きた。それは間違いないようだった。カティは唾を飲み込み、掌の汗をバジヤマの  
裾で拭いた。

敵味方問わず、生きて兵士が漂着すること自体は、この村では何度も前例がある。いつも  
は、機械的にユーメラの軍司令部に通報して、軍に出動して引き取ってもらっただけだった。だ  
が今は、肝心の情報伝達の手段が尽く使えなくなっていた。こんなことの前例は未だかつてな  
い。たとえ辺境部であっても、情報通信インフラの整備はユーメラの国策として重視され、ネ  
ット環境は国内のどこでも同じように使えるようになっていた。

だが、今、それが全く使えない。それは事実だった。つまり、物理的にも論理的にも、この  
村は完全に孤立してしまったということになる。見つかった兵士はたったの一人だとはいえ、  
この不気味なタイミングの一致は、村人たちを不安がらせるのに十分だった。

兵士——言うまでもなくヴァシリー——は、おとなしく村の中央広場に引き立てられて座ら  
されていた。両手には縄が打たれ、屈強な漁師が二人、威嚇するかのようにして両サイドに立  
っている。ヴァシリーは特に狼狽うろたえる様子もなく、集まった村人たちを眺めまわしていた。途  
中、カティと目が合ったが、ヴァシリーはほんの僅かに口角を上げただけだった。カティは、  
ヴァシリーがこの先どうなるのか不安になっていた。

「どうなるのかな……」

兄が訊いてくる。カティは答えない。答えようがない。

やがて村長がやってきて、ヴァシリーに尋ねた。

「それでアーシユオンの兵士、名前は」

「名乗る必要はないだろう」

「……まあ、いいだろう。だが、お前が見つかったのと同時に、村の駐在は姿を消した。ネットも電話も繋がらない。無関係とは思えんのだが」

村長は可能な限り威厳を保ちながら——とはいえ、今年で八十歳を迎える村長は、この炎天下の中立っているのもやっとなという状態だったが——詰問した。ヴァシリーは「さあね」ととぼけてみせる。

「こんな僻地の村を不安がらせるためにそんなことをしたのだとしたら、ますます——」

「直接的には村に用なんかないが」

ヴァシリーは顔を伏せて言った。表情が見えない。カティはその声音を聞いて、心臓を掴まれたかのような不快感を覚えた。朝から照り付ける太陽によって猛烈に暑いはずなのに、冷や汗が背中を伝う。

「ちよっと人に会いに来てね」

「人に？」

村長が思わず問い返す。村人たちもぎわめいた。カティにしてもそれは初耳だ。

「こんな辺境の村に、お前のような敵国人に用のある人間はおらん」

「用があるのはこっちだ。そっちの都合なんてどうだっていい」

ヴァシリー？

カティは目と耳を疑った。昨日までの優しい青年の姿はそこには無かった。冷たくて、無感情で……そう、名状し難い何か。ひたすらに不気味な何か。そこにいるのはそんなものだった。カティの全身に怖気が迸り、カティは思わず両手で自分の肩を抱いた。隣に立つ兄も、今さらながらに自分たちが犯してしまった罪を直感したのか、言葉なく立ち尽くしている。

まだ午前八時頃だというのに、周囲が突然薄暗くなった。比喻ではなく、まるで黄昏時のように、文字通りに暗くなったのだ。村人たちはざわめきながらも不安げに周囲を見回し、或いはヴァシリーに向かって「何をした」と詰め寄ったりもした。冷静でいられた村人は、おそらくただの一人もいない。

「さて、始めますか」

ヴァシリーはそう言うのと、何事もなかったかのように両手を拘束していた縄を解いた。両サイドに立っていた屈強な漁師——もちろんカティの顔見知りだ——は慌ててヴァシリーを取り押さえようとしたが、それは叶わなかった。二人の男の両腕の肘から先がすっぱりとなくなっていた。激しく吹き上がる血飛沫が広場中を汚していく。悲鳴を上げのたうち回る彼らをヴァ

シリィは見下ろし、そして鼻で笑う。

村人たちは蜘蛛の子を散らすように広場から出て行こうとしたが、村外れの方で発生した大爆発に驚いて足を止めた。音の方を見れば、村外れの家が次々と爆破されていっていた。それはやがてカティの家をも吹き飛ばす。粉微塵になって爆炎に飲まれ、爆風に飛ばされていく自分の家を呆然と見て、そしてカティは知らずにヴァシリィの所へと駆け寄っていた。

「ヴァシリィ、何をしてるの！」

「何って、儀式さ」

ヴァシリィは足元で苦しんでいる漁師の一人の頭を踏みつけ、そして、潰した。目玉が転がり落ち、脳が弾けた。こぼれた舌を伝って滑る液体が滴り落ちる。

カティは声にならない悲鳴を上げて、尻餅をついた。

「儀式って、何……」

「世界平和のための儀式さ」

ははは、と笑いながらヴァシリィは言った。そして遠巻きにしている村人たちを見まわし、声高に宣言した。

「君たちには全員、死んでもらう」

——と。

「何のためにだ！　こんな辺境の村に」

村長が怒鳴りながらヴァシリーに近付こうとした。が、次の瞬間、村長の首から上が砕け散った。激しく血液を撒き散らしながら、村長の身体が倒れた。砂混じりの舗装路に、その赤黒い液体が染み込んでいく。

「きつとね、この子の存在がいけなかったんだよ」

ヴァシリーはカティの右肩に左手を置いて、ニヤリと笑った。

「どうして——」

そんな風に呟いたところまでは、カティの記憶に辛うじて残っていた。

## ■ 01・02・06 》 触れてはいけない記憶

カティは目を見開いたまま、微動だにできなかった。ただ見知った顔の人たちが次々と死んでいく。どこからともなく現れた兵士たちに、一方的に虐殺されていく。やがてカティの父や母も、全身を蜂の巣にされた上に火炎放射器で焼き尽くされた。年の離れた兄は、果敢にもヴァシリィに向かって行ったが、身体を二つに割かれて殺された。姉はナイフで後頭部から口の中まで貫通され、死ぬまでレイプされ続けた。

もう一人の兄は、近付いてきた屈強な兵士にナイフで首を切られ、脊髄ごと頭を引き抜かれた。そしてその兵士はカティに向かって「ほらよ」とその背骨付きの頭を投げてよこした。カティは胸に当たったそれを何と認識することもできず、ただ茫然と突っ立っていた。小さな妹は、兵士に投げ上げられた挙句、重機関銃によって木っ端微塵に粉碎された。血と肉片の雨が、カティの上にこれでもかと言わんばかりに降り注いでいた。

わずか数分間。村の全ての家屋は爆破され、住民は皆殺しになった。

「君という存在が悪いんだ。恨むなら自分を恨むんだね」

ヴァシリィは立ち尽くすカティの肩に手を置いて、優しい声でそう囁いた。

カティ本人は、この虐殺の光景を明確に思い出したことは、社会に復帰して以来一度とて無かったが、ヴェーラとレベツカはその深層意識に触れてしまった。二人の中に流れ込んできた

のは、ありえない光景、ありえない景色。だが、それは間違いなくカティの体験した事実だった。カティ本人はそれを自我防衛機制に則<sup>のつと</sup>って忘れ去っていたに過ぎない。これは触れてはいけない記憶——間違いなくその類のものだった。

ヴェーラとレベツカは顔を見合わせていて、おおよそ何が起きているのかを把握したカティは唇を噛んで俯いていた。その視線は二人の少女の靴先の辺りを彷徨っていたが、おそらく何も見てはいない。

「……ごめんね、カティ」

ヴェーラは掠れ、消えてしまいそうな声で謝った。カティはしばらく硬直していたが、やがてゆるゆると首を振った。西日が赤い髪の毛を陽炎のように揺らめかせる。

「いいんだ」

やっとのことで、カティはそう口にする。そして自ら進んで、その時の状況を、記憶になるべく忠実に話し出した。カティはわかっていた。敢えて話す必要はないと。何故ならヴェーラもレベツカも、自分のその記憶を読み取ったのだから。それがどんな芸当なのかはわからない。だが、カティは言葉に表せない不思議な感触を、胸の内に確かに感じていたのだ。

カティがその時の出来事を話し終えた頃には、すっかり外は暗くなっていた。教室の天井灯たちが、寒々しく三人を見下ろしている。教室もすっかり冷えきっていたが、三人の誰もが「寒い」とは口にしなかった。できなかったのだ。

「見事に乗せられたのさ。バカだったんだ、アタシが」

「でも、カティさん」

レベッカが胸の前で手を握り締めながら口を開く。カティはぼんやりとその眼鏡の少女を眺めた。

「カティさんが何もしなくっても、たぶん結果は——」

「かもしれない」

カティは溜息をついて、ゆっくりと立ち上がった。ヴェーラとレベッカはそんなカティを見上げている。

「儀式と奴は言った。それだけははっきり覚えている。何のことはサツパリだが」

カティはカバンを持つと、二人を教室の出入り口へと促した。まもなく校舎が閉鎖される時間だったからだ。図書室の本は返却ボックスに入れておいて、明日手続きをすればいいかとカティは考える。

三人は歩きながら会話を続ける。薄暗くなっている廊下に、声と足音がやけに響く。

「思い出したんだけど」

ヴェーラが呟く。

「それ、例のユーメラ漁村襲撃事件だよね」

「……と、呼ばれているのか？」

カティはその事件からは意図的に遠ざかっていたので、そんな風に呼ばれていたただなんて知る由もない。もし目にしていたとしても、無意識のうちに忘却していた事だろう。

「目撃者はたった一人の女の子で、でもショック症状が酷くて、隔離病棟に収容された……」  
「そうだな」

カティはそれを短く肯定した。あの事件の後、たった一人生き残ったカティは軍によって収容されたのだが、極度の対人恐怖症と失語症に陥った。そのため、まともな事情聴取さえされることはなかったのだ。様々な方法でカティの記憶を引き出そうという試みも為されたが、カティは頑かたくなに思い出さなかった。

そのうちに人権派団体がカティの軟禁状態を嗅ぎ付けて、それらの試みをして二次的な虐待であると主張を始めた。彼らが声を上げ始めた直後に、カティから情報を得ようとすることは断念され、人権派団体も即座に鳴りを潜めた。それから七年間にもおよぶ闘病生活の末、カティはようやく言語を取り戻し、失われた七年間を猛然と取り返してきた。あの事件の記憶は封印したままで。

その後わずか一年の勉強とりハビリを経て、ユーマラの士官学校に入学し、そしてさらに二年が経過して今に至っているのだ。

「それはそうと、あの事件の頃って、お前たちはまだ赤ん坊、せいぜいが幼児じゃないのか？」

「うーん」

カティの疑問に、ヴェーラは首を傾げた。

「小さい頃のことってよく覚えてないんだよね。気が付いたらベッキーと一緒にいて、何年も隔離されて育ったから。ネットで外の世界の事は知ってたけど。その事件の事も、ネットで知ったんじゃないかな。なんか覚えてた」

「そうか。お前たちも複雑な事情がありそうだな」

カティはフツと息を吐く。ヴェーラとレベツカは顔を見合わせて、なんだか微妙な表情を浮かべた。カティはそれに気が付いたが、それ以上の追及はしなかった。してはいけない気がしたからだ。

ヴェーラは前を見たまま、ぼつりと言った。

「でもさ、あの事件って結局アーシュオンの局地的な襲撃事件とかそんな幕引きがされたけど、本当にそうだったのかな……」

「ヴェーラ、その話はもういいでしょ」

二人の少女が口論を始めそうな様子になったのを眺めつつ、カティはその辺の情報を脳内でかき集め始め、低い声でその検索結果を披露した。

「確か、アーシュオンの階級章を持っていた死体があったからとか」

そしてたぶん、その持ち主は兄だろう——カティは首を振る。背骨が付いたままの兄の頭部。それは写真のように鮮烈に記憶に焼き付いていて、いつでも自由に呼び出せるくらいだっ

た。ここ二年くらいは思い出すこともなかった記憶だが、今になってもやはり鮮明過ぎるくらいに鮮明に思い出せた。家族の死に様をどれも明瞭に記憶している自分の記憶力が、カティは相当に恨めしいと思っていた。だが、それらがあまりにも鮮明であり過ぎるからなのか、再生するにつれてリアリティが薄くなり、やがてまるで他人事であるかのように感じ始めていたというのもまた事実だ。

そういうえば、自分を助けてくれた軍の人の事もなんとなく覚えている。金髪で綺麗な女性兵士が、自分を抱いて泣いていた気がする。たぶんそれは正しい記憶なのだろうが、カティの中では夢のように脆くて儂い情報になっていた。無論、その人の名前など知らないし、階級章の模様すら覚えていない。

「カティは、その事件があったから士官学校に？」

「いや」

カティは明確に首を振った。

「それ以外、生きていく方法がなかったからだ」

結局、流されるまま生きている。カティは荒んだ笑みを浮かべた。

そんなカティを振り返り、ヴェーラはカティの右手を捕まえた。

「え？」

「わたしね」

ヴェーラは立ち止まり、カティを見上げた。その声は大きく震えている。

「痛い。すごく痛い。こんなこと、今まで感じたことない」

「痛い……?」

「心が、痛い」

ヴェーラは自分の胸に掌を重ねて訴えた。カティは戸惑い、レベッカはそんなヴェーラの肩に軽く触れた。

「昨日、カティを初めて見た時から、何かを感じていた。それがこれだったんだって、やっとわかった」

「そ、そうか」

そうとしか言えない。二人がカティの記憶を読み取ったことは何となくわかっているが、理解できているわけではない。そんなことはどちらかと言えばオカルトの部類に入るんじゃないかと、カティは今に至っても密かに思っている。

「うまく言えないけどね、この能力については」

心を読み取ったように、ヴェーラが言う。レベッカも頷いていた。カティは「まいったね」と髪の毛に手をやって肩を竦めた。

「でもね、わたしは強く思ってる」

ヴェーラはカティの手を放し、代わりにレベッカと手を繋いだ。二人の美少女が並んで手を

繋ぎ、カティの前に立ち塞がっている……ようにも見えた。

「わたしは、戦争を無くす。こんな悲しいことは起こさせないようにする」

「きつと、そのために私たちはいるんだと思うんです」

間髪を置かず、レベツカが継いだ。カティは微動だにせずに二人が繋いでいる手を見つめ、そして「そうだな」と口元を綻ばせた。

「そうかもしれないな」

そう言うてから、カティははたと思い出した。

「お前たち、まさか歌姫……?」

「歌姫、かあ」

ヴェーラはレベツカと顔を見合わせる。

「『歌姫防衛構想』の一部だっけ。ちよつと前に発表されたヤツ」

「うん、それだ」

「……まあ、『歌姫特別措置法』なんて法案もあるくらいだしね。凍結中だけど」

そうだそれだ、とカティは背いてみせる。ヴェーラはその白金の髪をプラチナ一掴みして後ろに流し、レベツカは眼鏡のフレームの位置を何度か直した。

「ま、仮にそうだとしても、そんなこと以前にさ」

ヴェーラはそこで言葉を区切り、カティを凝視しながら言葉を探す。

「そんなこと以前に、わたし、カティのために何かしたいなと思ってる」

「アタシの？ 会って二日目の？」

「二日だろうが一ヶ月だろうが関係なくて」

ヴェーラは微笑んだ。白金の髪に縁どられたその微笑には、人間離れた美しさがあった。だが、そこには体温があつて、それがカティには心地よかつた。

「あんなことを聞いて、ううん、見ておいて、じゃあサヨナラってわけにはいかないよ。だからわたしたちは、まずはカティのために何かしたい」

「そ、そうか」

その言葉の迫力に押されて、カティは何度かカクカクと頷いた。そして、

「そうだな——」

と、歩き始めながら思案する。

「じゃあ、お前たちが歌姫だったとしたら、いつかアタシのために何か歌ってくれよ」

「歌姫って、そんな呼び名だけど、兵器だよ、たぶん」

ヴェーラが言う。レベッカも頷いて同意している。

「カティのために歌ったら、カティが爆発しちゃうかも」

「それは困るな」

カティは笑った。その笑顔を見て、ヴェーラとレベッカも笑う。

「さ、学校に閉じ込められる前に出るぞ」

「あと二分しかないわ」

レベツカが時計を見て慌て始める。カティはヴェーラを右に、レベツカを左に手を繋ぎながら、速足で玄関を目指した。なおこの三人の位置関係は、今後何年間も維持されることになる。カティは繋いだ両手から伝わってくる温もりを感じ、同時に胸の内に鋭い痛みも覚えていた。

「……アタシなんかのために、妙な体験させてしまって、すまん」

「どうして謝る？」

ヴェーラは少し怒ったような口調で訊いてきた。カティはヴェーラと視線を合わせぬまま、答える。

「アタシは……そんなたいそうな人間なんかじゃないし」

「カティさん」

カティの言葉に割り込んでくるレベツカ。カティは思わず口を閉ざした。

「それだけの経験をしてきたんです。仕方ないと思います、そういう考え方」

レベツカは、カティがこれから語ろうとしたことを先回りした。そこにヴェーラがさらに被せてくる。

「そういう考え方、しちやいけないとは言わないよ。でも、時々にして」

「時々？」

「うん、時々」

ヴェーラは静謐せいひつな声でそう言った。カティは黙って頷く。

三人はかろうじて玄関の施錠前に校舎から脱出し、そのまま寮の方へと向かった。

「あれ、お前たちも同じ寮なのか？」

「ううん、寮から迎えを呼ぶの。わたしたちの寝泊りしてる場所は部外秘なんだ」

へえ、とカティは白い息を吐きながら応じる。空には月の姿こそ見えなかったが、いくつもの星が燦然とその存在を主張していた。

「十年、かあ」

ふと、ヴェーラが白い息を吐きながら呟いた。

「十年後、わたし、何してるんだろ」

立ち止まってそう言うヴェーラの表情は、冷たく、固い。

「なんかね、見えちゃう気がするんだ」

「見える……？」

「なんとなく、ね」

ヴェーラは「はあ」と息を吐いた。白い霧がふわりと舞って、夜の闇に消えて行く。

「カティは、その頃までには……自分のことが好きになれていたらいいね」

ヴェーラは沈鬱な調子でそう言い、それきり黙り込んだ。

時は西暦二〇八一年。

これは二人の少女による初出撃の、七年前の出来事だった。

## ■ 01・02・07 ≪ 観測者

ふふふふ……。

笑い声が闇の中に響く。その闇の中に、銀色の揺らぎが浮かび上がる。

「歌姫計画とは、まったくたいそうな命名だこと」

その声は闇の中にスイと溶けて消えて行く。

「死せる戦士の魂たちはどうするつもり？」

その闇は、言うならば深淵であった。名状し難い銀色の何かは、その闇の中に存在する唯一の何かだった。

「……そう。そうね。私は別に戦乙女を気取ろうだなんて考えてもいけないけれど」

銀の揺らぎは笑ったのだろうか。一際大きく揺れている。

「ふふふ、その呼び名は嫌いじゃないわ。そう、確か意味は『深淵の谷間に巣を張る者』でしたっけ。人間の想像力には関心するわ。よくもそんな名前や定義を考えつくものね。それに、あなたがち大外れでもない」

闇は常に一定に、そこにあり続ける。銀の揺らぎもまた、そこに鮮烈に灯っている。だが、何をも照らすことはない。

「そう、何百年か昔のあなたにもこんなことを言ったわ、そういえば。あなたは覚えていない

でしょうけれど」

可笑しそうに、それは言う。

やがてその銀の炎が、じわりと闇に溶け始める。

「いいわ。今回もあなたに協力するわ。面白そうなもの」

それに、と、銀の姿が付け加える。

「あなたはティルヴィングを一番うまく扱えるかもしれないわ。いえ、初めてよ、こんなことを言うのは」

ふふふ、と、また笑う。

「じゃあ、今度こそ、私たちを本気で愉たのませてちょうだい」

私たちも立派に役割を演じてみせるから。

そう言い残し、銀の炎のような揺らぎはふわりとかき消えた。

そして世界はまた、ただの揺らぎに戻っていった。

続きは、カクヨムで。

<https://kakuyomu.jp/works/1177354054882023827>